

高齢者ソーシャルワークの 科学化にむけた実践事例研究

——エコシステム構想の活用を通じて——

小 榮 住 ま ゆ 子*

The Case Study for Establishment of Scientific Social Work Practice with the Aged

Mayuko Koezumi

要旨：本研究の目的は、エコシステム構想を活用した高齢者ソーシャルワーク実践事例の支援局面そのものへの考察から、方法の科学化にむけたエコシステム構想によるソーシャルワークの方法を導き出すことである。まず、科学的なソーシャルワークの理論について概観する。次いで、高齢者に対するエコシステム構想について説明し、最後に、エコシステム構想による高齢者ソーシャルワークの実践事例を考察する。本研究の結果、エコスキャナーを活用した高齢者ソーシャルワークの展開過程が抽出でき、またエコシステム構想が論理性、客観性、普遍性という科学性に対し意義ある方法であることが確認された。以下は、本論文の構成である。

- I はじめに
- II 科学的支援方法としてのソーシャルワークの理論
- III 高齢者に対するエコシステム構想
- IV エコシステム構想による高齢者ソーシャルワークの実践事例
- V 事例の考察
- VI おわりに

Abstract : The purpose of this case study is to consider the process of life enhancement itself in Social Work practice with the aged, and to find a method of Social Work practice that utilized Ecosystem Projects. The first section reviews a scientific literature relevant to social work practice. The second section explains Ecosystem projects which is a method of Social Work with the aged. The third section examines and considers two case studies of the Social Work practices with them. As a result of study, the process of Social Work that utilized the Ecoscanner was extracted, and it was identified that the Ecosystem Projects is an important method as the scientific practice.

Key words : 高齢者ソーシャルワーク Social Work Practice with the aged エコシステム構想 Ecosystem projects エコスキャナー Ecoscanner 科学的な実践 scientific practice

*関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科臨床福祉学専攻 学生

I はじめに

ソーシャルワークの科学化が重視されて久しい。近年では、Evidence-Based Practice (根拠のある実践:EBP) といった英国を発端に普及した新たな実践理論が注目されている。このように、ソーシャルワークを科学化するということは、個々人の勘や経験、属人的なソーシャルワーク実践にのみ頼るのではなく、論理性、客観性、普遍性を有した支援科学として、ソーシャルワーク実践を確立することであると考えられる。

このソーシャルワークの科学化にチャレンジしているのがエコシステム構想である。エコシステム構想とは、エコシステム視座と、それを具現化するために考案されたコンピュータ支援ツール「エコスカナー」を活用しながらソーシャルワークを実践することで、乖離するソーシャルワークの理論と実践を科学的に統合化していこうとするアイデアである。

しかし、科学的支援方法としてのエコシステム構想をもちいたソーシャルワークの実証研究は、ソーシャルワーク教育、障害者、家族、児童を対象にしたソーシャルワーク実践研究などにおいて、はじまったばかりであり、高齢者ソーシャルワークにおいても一大課題となっている。

そこで本稿をエコシステム構想による高齢者ソーシャルワークの実証的な事例研究と位置づけ、まず、科学的支援方法としてのソーシャルワークの理論と、これまでの研究によって開発を試みてきた高齢者に対する実践支援ツール「エコスカナー」を具備したエコシステム構想のしくみについて概観する。そして、本稿の目的であるエコシステム構想を活用した高齢者ソーシャルワーク実践事例の支援局面そのものへの考察から、方法の科学化にむけたエコシステム構想によるソーシャルワーク実践について検討してみたい。

II 科学的支援方法としての ソーシャルワークの理論

1. ソーシャルワークの特徴

わが国のソーシャルワークの概念は、社会福祉固有の支援科学としてどのように定義し、その方法論をどのような内容で構築していくのかといった共通認識がえられているとはいいがたい。それは、ソーシャルワークがケースワークやケアマネジメントといった方法をまとめた総称のように扱われ、抽象的な概念であると考えられてきたことにも起因する。

こうした背景をふまえ、太田義弘は、ソーシャルワークを次のように定義している。「ソーシャルワークとは、人間と環境からなる利用者固有の生活コスモスに立脚し、より豊かな社会生活の回復と自己実現への支援を目標に、独自の支援レパートリーの的確な活用による社会福祉諸サービスの提供と、利用者自らの課題解決への参加と協働を目指した支援活動の展開であり、さらに社会の発展と生活の変化に対応した制度としての社会福祉の維持・その諸条件の改善・向上へのフィードバック活動を包括・統合した生活支援方法の展開過程である」¹⁾。

つまり、ソーシャルワークは、利用者一人ひとりによって異なる課題解決・自己実現にむけ、利用者本人と利用者を取りまく環境、時間や空間からなる生活コスモスを対象に、科学的かつ専門的な支援レパートリーの活用から社会福祉諸サービスを提供するとともに、支援ツールを介した利用者とソーシャルワーカーの参加と協働による科学的かつ実存的な支援局面をフィードバック活動により展開することで、利用者の社会的自律性の向上だけでなくサービス開発や制度・政策の改善といった環境調整をもめざす包括・統合的 (ジェネラル)²⁾な「生活支援過程」であるとまとめることができる。

2. ソーシャルワーク実践の特性概念

この「生活支援過程」は、生活概念・支援概

念・過程概念というソーシャルワーク実践の3大特性概念として提示されている³⁾。生活概念とは、その時々の人々の価値や経験、家族や友人、職場とのつながり、流れゆく時間などから個別・具体的に成りたつ利用者の生活実体を、利用者自身と環境との交互作用により成長・発展する生態的な1つのシステム、すなわち「生活コスモス」として捉えた包括的な概念である。これは、ソーシャルワークの固やかつ専門的な概念であるといえる。

支援概念とは、生活コスモスで生じる利用者の課題や自己実現にむけ、援助者側の「～してあげる」ないし「～したいから」、あるいは「～しなければならないから」といった論理やルーティン化された業務としての方法や技術、また「他者に恩恵を与える実践」といった援助概念ではなく、利用者の主体性、すなわち実存（その人固有の価値や意味づけが何よりもまさるといふ発想に立脚した人間の現実存在の意）を尊重した「自らすすんで～せずにはおれないから」⁴⁾といった支援者側の論理と利用者との参加と協働による方法で実践するという概念である。その支援は、社会福祉諸サービスの提供だけでなく利用者にも備わっている社会的自律性を向上させることに重点がおかれている。

過程概念とは、ソーシャルワークのとりくみそのものを示す概念である。それは、インタークからはじまりターミネーションでおわるという各システムで展開される一連のソーシャルワーク支援局面⁵⁾でもあれば、マクロからミクロまでを循環する支援過程⁶⁾でもある。国家から地方自治体へ、地方自治体から実践機関へ、実践機関から利用者へと支援局面の展開によって利用者支援がおこなわれる一方で、その支援による成果や結果を各システムにフィードバックし、ボトムアップ方式で、制度・政策、理論などを構築していく支援局面も存在する。これら支援局面の積み重ねがミクロを基点にミクロとマクロを循環するジェネラル・ソーシャルワークの支援過程である。

3. エコシステム視座からの生活コスモス考察

利用者の生活コスモスを科学的に支援するために必要なのが、システム思考と生態学的視座の統合化からなりたつエコシステム視座からの生活コスモス考察である。システム思考とは、物理学や生物学の影響をうけながら発展してきたシステム理論にもとづく論理的、系統的な物の捉え方や考え方のことである。太田は、システム思考について次のように説明している。「システムとは、ある実体（entity）の現実を把握するために、それを構成している秩序立った要素と、その要素の結合がもたらす独特な生態的均衡関係からなる統合的全体性（holism）を意味する概念で、その実体を形式的に構造・機能・変容（過程）の3特性に分解しながら統合的に考察しようとすることである」⁷⁾。システム思考とは、システムの構成要素を意味する「構造」面と構成要素間での働きと成果を意味する「機能」面、そして、システムの変容状況を意味する「変容」面という3大基本特性の視点から生活コスモスのもつ特性を分析・統合して理解しようとする思考方法といえる。

生態学的視座とは、人間が環境からの影響をうけながら成長・変容する一方で、環境をも変化させる存在であるという人間と環境の交互作用を主張する生態学理論にもとづく物の捉え方、見方である。太田は、生態学的視座を「人間の生活という生きざまが、人と環境との相互変容関係により生成・循環されるところから、人と適応能力を高め、環境を整備することによって、再び両者の適合関係を改善するように働きかける発想であり、それによって生活が変容していく過程である」⁸⁾と説明している。つまり、生態学的視座とは、人間と環境の交互作用により成長・変容していく生きざまとしての生活コスモスのもつ過程を動的に把握しようとする観点といえる。

そして、このシステム思考による記述方法と実体の変容過程を動態として表現する生態学的視座を統合化したものが、エコシステム視座で

ある。エコシステム視座は、「人と環境から成る生活実体の複雑性を把握するだけでなく、その過度な単純化や縮小化を回避することも目的におきながら、それらの相互連関や多層な現実における状況を認識する方法」⁹⁾として重視され、①生活課題の包括的視点、②エコシステム視座からのアセスメント、③マイクロからマクロを包含する支援過程がその特徴としてあげられている。しかし、これらすべてが④メタ概念であり¹⁰⁾、しかも「エコシステム論的視座は重要なことは何も与えていない」¹¹⁾と指摘されているように、具体性に欠けた理論といわれている。

こうしたメタ概念であることへの批判を背景に、エコシステム視座からの生活コスモス考察によるソーシャルワークを実践化するためにもちいられたのが中範囲概念¹²⁾である。そして、この中範囲概念によって考案されたのがエコシステム構想であり、この構想によって抽象的なエコシステム視座は現実的な考察の視点、そし

て方法になったのである。

表 1 は、ソーシャルワーク概念をまとめたものである。このソーシャルワーク概念の最大の特徴は、利用者の課題解決・自己実現の達成と社会福祉サービスの改善・開発にむけ、生活コスモスを実践の構成要素である価値・知識・方策・方法¹³⁾からなるエコシステム視座から包括的に考察することができるエコシステム構想と、それを介して展開される科学的かつ実存的な実践活動とフィードバック活動による包括・統合的な支援局面、支援過程にあるといえる。

Ⅲ 高齢者に対するエコシステム構想の展開

1. エコシステム構想の特徴

エコシステム構想は、メタ概念であったエコシステム視座からの生活コスモス考察をコンピュータ支援ツールによって可能にし、乖離する制度・政策と実践活動や理論と実践などを包括・統合化する架け橋＝媒介項の役割を担っている。そして、このエコシステム視座からの生活コスモス情報を瞬時に処理し提供するために開発されたのがコンピュータ支援ツール「エコスカナー」である。エコスカナーは、大量かつ多様な生活エコシステム情報をコンピュータの情報処理機能で迅速かつ的確に処理し、数量化された情報をシミュレーションによって考察可能なデータへと処理し、ビジュアル化を可能にする。

図 1 は、エコシステム構想による高齢者ソーシャルワークを図式化したものである。利用者はエコスカナーによって、感覚的に生きる生活がビジュアル化されることで、自己生活に関心をもち始める。そして、これまで他人まかせであった支援活動に対し、主体性と責任性をもって、ソーシャルワーカーとともにとりくむことができる。一方、ソーシャルワーカーは、利用者の複雑かつ多様な生活コスモスが、エコスカナーによってビジュアル化されることから利用者の参加と協働が促進され、科学的かつ実存的に支援局面の展開に有効でかけがえのな

表 1 ソーシャルワークの概念整理

	ソーシャルワーク
目的	利用者の課題解決・自己実現 社会福祉サービスの改善・開発
実践特性概念	生活概念・支援概念・過程概念
考察方法	システム思考・生態学的視座
	エコシステム視座
支援方法	科学性と実存性の統合的方法
具体的方法	エコシステム構想
支援局面	7段階
	インテーク
	アセスメント
	▶ プランニング
	▶ インターベンション
	モニタリング
	再アセスメント
支援局面を導く概念	包括・統合化

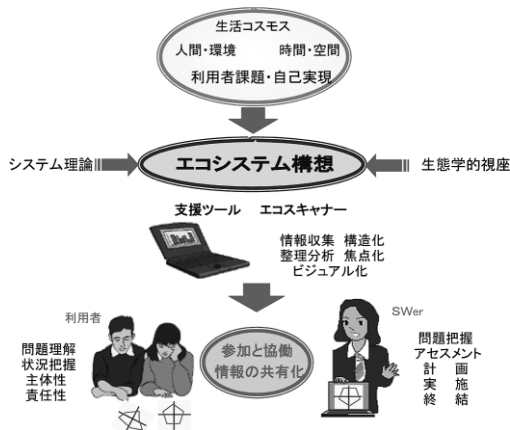


図1 エコシステム構想によるソーシャルワーク

い役割を果たすことができる。

このようなエコシステム構想によるソーシャルワークの特徴を、次の7点にまとめることができる。

- (1) 支援ツールによって、利用者固有の複雑かつ多様な生活コスモスを、エコシステム情報として包括・統合的に捉えることができる。
- (2) 支援ツールによって、生活構成要素や要素間の相互作用により生じる変容状況をビジュアル化することができる。
- (3) 支援ツールを介在させることによって、科学的な支援局面、支援過程展開が可能となる。
- (4) 支援ツールによるビジュアル化から、各支援局面の展開に必要な生活コスモス情報を利用者にもわかる可視的資料として提示できる。
- (5) 支援ツールによるビジュアル化から、利用者の支援過程への主体的な参加や協働が促進される。
- (6) 支援ツールによるビジュアル化から、生活コスモスに対する利用者とソーシャルワーカーに共通認識・理解をもたらすことができる（ズレの解消）。
- (7) 支援ツールによるビジュアル化によっ

て、利用者の生活に対する実感との照合と、実感にもとづいた価値の問い直しといった経験がえられ実存的な支援展開が可能になる。

2. 高齢者に対するエコシステム情報の構成と内容

こうした特徴をもつエコシステム構想の基盤となる高齢者の生活エコシステム情報の準拠枠は、表2に示すとおりである。生活コスモスという雑多な要素の集合を最大公約数で系統的に整理し、要素をカテゴリー別に類型化した情報収集票ともいえる。このエコシステム構想の枠組みは、上位から領域、分野、属性、内容といった構成子と、その構成子の特徴をあらわす価値・知識・方策・方法の4大構成要素を基盤にした因子¹⁴⁾からなりたっている。

具体的には、生活という拡がりの全体を順次カテゴリーとして包括・統合的に捉えるために、領域を人間と環境とに2分割、分野として利用者・基盤・周辺・支援とに4分割、それらを構成として特性・問題・身辺・家族・近辺・資源・機関・ネットワークに8分割し、さらに生活の内容として32分割し、ミクロからマクロにわたる生活内容を指標として配列している。そして、この32分割された各構成子の特性をあらわすため、その下位に、4大構成要素をふまえ構成した質問項目の4因子を整備し、128因子から生活をトータルに捉えようと試みている。

このように、利用者の課題解決・自己実現への支援のために収集される生活エコシステム情報は、必然的に多量になるため、即座に収集し分析、処理するコンピュータ支援ツール「エコスカナー」が欠かせないのである。

3. エコスカナーの構造と機能

エコスカナーは、系統的に構造化された32の生活内容構成子における現状を、下位に構成された質問への回答からポイントとして数量化

表 2 高齢者の生活エコシステム情報の構成と内容

生活システム 領域カテゴリー				実践要素の構成 内容情報	1 価値 態度 姿勢 志向 機運 関心 自覚	2 知識 現代 事実 実状 内容 関係 理解	3 方策 制度 政策 計画 施策 身通 私案	4 方法 取組 対応 参加 活用 協力 努力
全体	領域	分野	属性	内容	価値意識	状況認識	資源施策	対処方法
生 活	1 人	I 利用者	(1)特性	A 自己概念 B 目標確立 C 対人関係 D 社会的自律性	自己への関心 生きがい意識 対人関係への関心 適応・環境調整への関心	自己理解 目標の具体化 対人関係の現状 適応・環境調整状況	自己効力 目標達成計画 対人関係改善計画 適応・環境調整計画	自己受容 目標達成努力 対人関係改善努力 適応・環境調整努力
			(2)問題	A 身体 B 精神 C 社会 D 経済	問題への関心 問題への関心 社会的役割への関心 生計への姿勢	問題の自己理解 問題の自己理解 社会的役割の自己理解 生計の現状	問題の維持改善計画 問題の維持改善計画 社会的役割遂行計画 生計の維持計画	問題の改善努力 問題の改善努力 社会的役割遂行努力 生計の維持努力
		II 基盤	(3)身辺	A 文化娯楽 B 参加交流 C 居住空間 D アクセス	趣味娯楽への関心 社会への関心 住居への関心 アクセスへの関心	趣味娯楽の参加状況 社会との関係 住居の現状 アクセスの状況	趣味娯楽の参加計画 社会参加計画 住居の維持計画 アクセスの改善計画	趣味娯楽の参加努力 社会参加努力 住居の維持努力 アクセスの改善努力
			(4)家族	A 理解 B 連帯 C 意欲 D 社会性	家族による理解 家族連帯意識 家族の支援意識 社会への関心	家族の役割関係 連帯の現状 支援の状況 社会との関係	家族役割の改善計画 連帯の改善策 支援への見通し 社会参加計画	家族役割改善の努力 連帯復元努力 支援への協力 社会参加努力
	2 環	III 周辺	(5)近辺	A 近親 B 近隣 C 友人・同僚 D ボランティア	近親の姿勢 近隣の関心 友人・同僚の関心 Vr の機運	近親との関係 近隣の理解 友人・同僚の理解 Vr の支援状況	近親の支援見通 近隣の支援見通 友人・同僚の支援策 Vr の支援計画	近親の支援協力 近隣の支援協力 友人・同僚の支援協力 Vr の参加計画
			(6)資源	A 介護保険内 B 介護保険外 C 行政 D コミュニティ	SV の姿勢 SV の姿勢 行政の姿勢 コミュニティの雰囲気	SV の内容 SV の内容 行政の現状 コミュニティの実状	SV の改善計画 SV の改善計画 行政の推進計画 コミュニティ形成計画	SV の展開 SV の展開 行政の取組展開 コミュニティ取組展開
		IV 支援	(7)機関	A 保健 B 医療 C 介護 D 相談	保健職種の姿勢 医療職種の姿勢 介護職種の姿勢 相談職種の姿勢	保健職種の活動状況 医療職種の活動状況 介護職種の活動状況 相談職種の活動状況	保健職種の活動計画 医療職種の活動計画 介護職種の活動計画 相談職種の活動計画	保健職種の取組 医療職種の取組 介護職種の取組 相談職種の取組
			(8)NW	A 私的 NW B ビア NW C 機関 NW D 地域 NW	私的 NW への関心 ビア NW への関心 機関 NW への関心 地域 NW への関心	私的 NW の現状 ビア NW の現状 機関 NW の現状 地域 NW の現状	私的 NW の改善計画 ビア NW の改善計画 機関 NW の改善計画 地域 NW の改善計画	私的 NW の改善努力 ビア NW の改善努力 機関 NW の改善努力 地域 NW の改善努力

注) 斜線部が高齢者の生活エコシステム情報のオリジナルな部分。

し、その数値からシミュレーションされグラフとして表出するというしくみである。現在、因子ポイント計算法¹⁵⁾が採用されており、利用者の生活エコシステム状況を示すバロメーターとして 0~100 ポイントの範囲で表示されるようになってきている。各質問回答欄は、0~40 ポイントの 5 段階に分類され、理想的な生活を示す回答を 40 ポイントにし「理想値」としている。そして実際にえられた回答値を理想値で割り

100 分率計算をする。これによりえられた価値・知識・方策・方法群の数値を足したものがその因子のポイントとなる。

こうした計算方法により数値化された結果をグラフ化して提供することになるが、あくまでも利用者の生活コスモスをビジュアル的に把握するためのものであり、ポイントの何点以下が悪く何点以上が良いといった結果を導き出すものでもなければ、介護保険制度の介護認定で要

介護度を算出するといった類のデータでもない。提供されたポイントの意味は、相対的なものである。つまり、エコスカナーは、生活コスモスをビジュアル化し、ソーシャルワークを効果的かつ科学的に展開していくための道具にすぎないのである。

また、エコスカナーは、今日一般的に普及しているエコマップなどの支援ツールの成果と課題を克服するためにチャレンジしている支援ツールである。とくに、これまでの課題であった評価者の恣意性に依拠、客観性の欠落、ビジュアル化方法の工夫、生活変容の理解に不向き、書き手によってビジュアル化の形相が異なるといった点に関しては、大きな期待がよせられている¹⁶⁾。

このように、エコスカナーないしエコスカナーによるビジュアル化は、エコマップで乗り越えられなかった生活コスモスの科学的な情報を提供するだけでなく、利用者とソーシャルワーカーの参加と協働を促進させ、利用者の実存を尊重した支援展開を可能にする意義深い支援ツールであると考えられる。

Ⅳ エコシステム構想による 高齢者ソーシャルワークの実践事例

1. 事例考察の目的および方法

本稿における事例考察は、ソーシャルワークの支援局面で展開されるソーシャルワーカーと利用者の参加と協働による支援レパートリー、支援技術、そして支援局面そのものへの考察を深めていくこと以外に科学化への方法はないという発想¹⁷⁾に立脚し、エコシステム構想による高齢者ソーシャルワークの展開事例における生活支援過程そのものへの考察から、①科学的な支援局面、②ソーシャルワークにおける科学的情報の意義、③方法の科学化にむけたエコシステム構想の意義について検討することを目的としている。

本事例は、小規模デイサービスセンターの利用者に対し、生活相談員（筆者、社会福祉士）

がソーシャルワークを展開した事例である。紙面の関係上、本稿では2事例について考察してみたい。事例1は、平成18年6月、事例2は、同年7月の利用開始から9ヶ月間の展開事例で、ケース記録をもとに支援活動の概要を局面毎にまとめている。倫理的配慮として個人名や施設名はアルファベット表記や仮名とし、個人が特定できないようにしている。

2. 事例1 家族不和により居場所がないAさんへの高齢者ソーシャルワークの展開

【利用者の基本情報】

氏名：Aさん 女性 75歳

性格：社交的、おしゃべり、人と話をするのが好き。

趣味：編み物であったが今は肩がこるため何もしてない。

要介護：自立。

ADL：体力が少し衰えてはいるが、全て自立。
家族親戚状況：同居している長男夫婦と仲が悪く、分家の次男夫婦とは良好な関係が築けている。

住居：平成9年より2世帯住宅を新築したが、Aさんは1階で夫は2階で生活し、日中働く夫は昼間不在であるため、ほとんど独りで家にいる。長男夫婦とは別々の生活スタイルである。

生計：年金生活。

【インテーク】

相談相手もなく途方に暮れていたAさんは、最寄りの警察から勧められデイサービスに来所する。Aさんは生活相談員や介護スタッフにこれまでの生活状況や家族関係の現状について説明し「全額負担でもいいから福祉施設を利用させてもらって介護予防に努め、精神的にも安定した生活を送りたい」と悲痛な顔で訴えた。話し合いの結果、デイサービスの体験利用に後日来所することとなる。体験利用では、家族不和で辛い日々を送っていることについて一方的に話をする場面や、苦手な人が隣に来ると

「私、あの人の横はいや」と自分の思っていることを発言する場面など、A さんの性格が垣間みられた。同日、介護保険非該当である A さんの利用についてスタッフで話し合い、健康な高齢者でも利用できるよう全額費用負担の「サロン」としての機能もデイサービスに付加し、広く地域の高齢者の憩の場となるようとりくむ方針が決まった。その後、A さんに利用料やサロンの内容を説明し利用契約をおこなった。

A さんは週 5 回、デイサービスに通所することが日課となった。しかし「毎日が辛い。嫁に罵声をあびせられ家に居てられない。でもいく場所がないし・・・本当に辛い。死んだほうがましよ。あんな 2 世帯住宅を建てたからこんなことになったのよ。家に火をつけようかといつも思うの」と自己の厭世観を涙ながらに訴える日々が続いた。相談相手もなく、鬱々した気分が続き、心療内科を受診したこともあるが「病気ではないという診断結果だった」とため息まじりに述べていた。後日、生活相談員は家庭訪問をする。A さんの部屋は雑然としており、長男が暴れて襖に穴をあけたこと、嫁が掃除もろくにしないことなど話す一方で、養子へいった次男夫婦との関係性は良好であり、色々協力してくれありがたいという。また、デイサ

ービスに通うことで相談相手ができ気分転換になること、介護予防のために健康に留意した生活を送ろうと心がけていることなど話してくれる。長男に A さんとの利用契約が結ばれたことを伝えると「最近おかしいんです。嫁はいつも母に殺されるか分からないといっている」という。長男の話から家族間の相互理解ができていないことが伺えた。生活相談員はこれまでの A さんや長男の言動から、事前アセスメントとして実践支援ツールに生活エコシステム情報を入力し、A さんの生活コスモスの客観的把握と課題解決への方向性について分析をおこなった (図 2 参照)。

【アセスメント】

A さんとツールを介して話し合う。A さんは日々実感していることと考えていることなど話しはじめる。「毎日どんよりした感じの・・・精神的な問題は自分で理解しているし、だからデイサービスに通ってとりくもうとしているのよ」、「近所の人、特にそのカメラ屋さんとはたまに話を聴いてくれるの・・・友達とは東京にいて物理的に協力してくれるってことはないけど、手紙や電話をくれたり気を配ってくれるの、すごくありがたいわ」と語る。近隣に住むカメラ屋の夫婦とは以前から仲良くしており、今でも交流があるとのことであった。生活相談

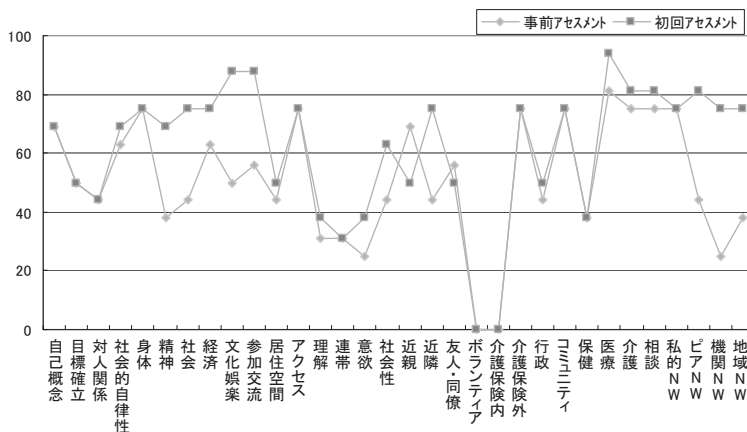


図 2 A さんに対する初回アセスメント結果と分析

員は A さんとの対話やこれらの情報をふまえ、実践支援ツールを使って初回アセスメントを実施し分析した。

【アセスメントの分析】

A さんがデイサービスを数回利用したのち自己評価を実施したため、事前アセスメント結果よりも問題や周辺に改善がみられた。近隣や支援ネットワークに関する生活相談員と A さんの認識にズレがみられ、A さんの捉えている認識を理解することができた。A さんにとって「他者に話を聴いてもらう」という他者との関係性が精神的安定により影響を与えている。社会的自律性の向上をめざしたグループワークによる良好な対人交流関係、デイサービス内の役割遂行による社会的活動への参加、カウンセリングを通じた家族間の相互理解、調整をおこなっていく必要がある。

【プランニング】

A さんに生活エコシステム状況を見せながら初回アセスメントによる分析結果を説明した。「デイサービスで色々な人と会話することで気持ちが安定しているようです。問題が少し

ですが改善されていますね」というと、「本当だわ。問題が良くなっているわね。嬉しいわあ。これが家族ね。あら、少しだけどよくなっている・・・おかしいわね、ここへきてから気持ちが救われたし日中会わないですむからかしらねえ」と実感とデータとのズレを語る。その後、データをもとに今後の生活について希望を尋ねるなどして話し合いを重ね、支援計画書を作成した（表3参照）。A さんはデータ用紙を夫にみせるといいもって帰った。

【インターベンション】

- ①A さんは「部屋に用紙をはって、いつもどこがよかったのかしらって確認しながら運動や散歩に頑張っているのよ」という。また夫にグラフをみせたところ、行って気持ちが楽になっているのであればと自分の収入の半分をデイサービス利用料だといって A さんに渡してくれたと嬉しそうに話す。
- ②A さんに昼食時の準備や送迎の手伝いなど簡単な役割を担ってもらおう。「責任重大だけど私みたいな者でも人の役にたてて嬉しいわ」と笑顔でいい「何かすることがあるなら

表3 A さんの通所支援計画書の概要

本人要望	息抜きとともに、介護予防としてデイサービスを利用したい。
総合支援方針	デイサービスで家庭内で溜め込むストレスや内に溜め込んでいる想いを傾聴し受容しながら、嫁との関係において前向きな発想ができるよう、カウンセリング機能を十分に発揮した支援の展開。
ニーズ	①会話を通じたストレス発散による精神的安定の確保。 ②対人交流・社会参加の促進。 ③運動、口腔等の機能向上訓練による体力の維持・増進。
長期目標	①デイサービスが A さんにとって居心地のいい場所となるように支援する。 ②サロン利用であることからデイサービス内の仕事も担ってもらい社会的・精神的安定を目指す。 ③総合的な体力の維持・増進による身体的側面への不安解消を目指す。
短期目標	①レクリエーションへの参加やコミュニケーションを通して、人とふれ合いストレス解消を目指す。 ②デイサービスで実施する予防的運動・口腔機能向上訓練への参加による体力の維持・増進。 ③外出時の散歩（ウォーキング）。
サービス提供内容	入浴・食事・対人交流・レクリエーション。

遠慮なくいってね」とスタッフに声をかけ、自ら仕事をみつけては手伝うようになる。

- ③長男夫婦に自ら歩み寄ることはなく、両者の関係性に改善はみられない日々がつづく。
- ④古くからの知人をデイサービスに招待した A さんは、久しぶりの対面に涙ぐみながら会話を楽しむ。「月 1 回は一緒にご飯を食べたり話をしたりしましょうね」と自分からネットワークを広げる言動がみられる。
- ⑤週 5 回を実費利用で通所する A さんの生計について話し合った結果、施設利用 1 回につき 3000 円の給付 (最大 4 回) がえられる地域支援事業の独居高齢者施策へ申請する。同居者は本来申請できないが、A さんの実情から独居とみなされ給付が開始される。

【モニタリング】

A さんにとってデイサービスが居心地のよい場所となっており、毎日欠かさず通所している。また、スタッフや他の利用者と時間を共有することで社会的自律性が少しずつ高まっており、要支援・要介護高齢者のために何かをすることが習慣となっている。介護予防プログラムにも積極的に参加し、他の利用者とも楽しそうに話をしており、ストレス発散ができています。

【アセスメント】

再アセスメントを実施。A さんは「前回と

違って対人関係とかを家族との関係で答えたからきっと前より低い結果になるわ」という。また、地域支援事業による金銭援助については、「たったの 4 回分じゃ月 20 回も利用している私の生活にはなんの足しにもならないわよ」と不満をもらす。生活相談員はこれまでの A さんの生活状況と話し合いを通じてえた情報をもとに再アセスメントをおこなった (図 3 参照)。

【アセスメントの分析】

前回より改善がみられる。他者への配慮、またデイサービス内での役割遂行から、他の利用者やスタッフに感謝され肯定されている自分が「ここ (デイサービス)」に存在するということを実感することで、家族や自身の生活に対する悲壮感や孤独感、また精神的ストレスが軽減している。しかし、長男夫婦との関係性に変化はあまりなく、「デイサービスを利用すること」は「家族と顔を合わせないですむ」というその場しのぎの方策にしかなくなっていることから、家族との調整が今後の課題である。

【プランニング】

ビジュアル化された前回と今回のアセスメント結果を A さんに提示する。A さんの前向きな生活態度により特性は改善していること、精神的に落ち着きデイサービスでの役割も出来る範囲でおこない責任や自信につながっていること、家族関係は A さんの実感から前回に比べ

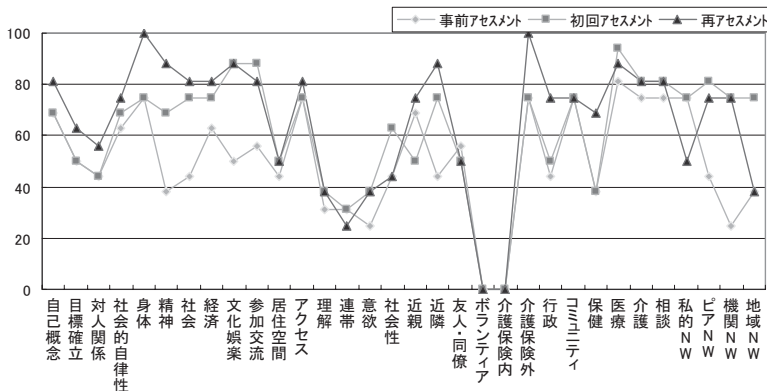


図 3 A さんに対する再アセスメント結果と分析

低い値となったことなどについて説明をした。Aさんは「やっぱりねえ！家族は低くなるわよね。でもなんでも話せる友達も増えたと発散できているって本当に実感するの。心の問題が改善されつつある証拠よね」とうなずきながらいう。そして、家族関係はすぐに改善できる問題ではないので自分がストレスをためて鬱にならないよう精神的安定や体力維持に努めるため、今後も実費でデイサービスを利用したいといい、話し合いの結果、支援計画書の内容を続行することになった。

【インターベンション】

- ① Aさんに新たな役割として体験利用に来られる高齢者のお世話役を担ってもらいと、積極的に対話され、相手の話に耳を傾ける姿勢などがみられはじめる。
- ② 生活相談員がAさんの親族に連絡をする。親族は「いつも、Aさんは嫁に対して変なことばかり言うのでみんな困っている。でも毎日デイサービスを利用させて頂いて、本人も喜んでいっているのもそれはありがたい」という。
- ③ Aさんから「知人とご飯を食べにいった今までのないくらい楽しい時間をすごせたの。相談できる人が身近にいるってやっぱり幸せね」と電話がある。「家族に対する不満や今後の不安は、そういったよき相談者を与えて

くれるためにあったのかもしれませんが」というと「うまいこといわ、ほんま神様ね」と弾むような声で返答がある。

- ④ 家庭訪問するとAさんが「嫁が宅急便の受け取りをしてくれてね、お礼にりんごをおすそわけしたのに玄関に置いたままで・・・せっかくお礼の気持ちであげたのに」という。「そうですか・・・お礼の気持ちだったのね」というと「少しでも歩み寄れたらと思ったんだけど・・・やっぱり無理ね」と苦笑する。
- ⑤ 朝一番に来所されたAさんが開口一番、「昨日の晩ね、長男が久しぶりに部屋にきたの。2時間ほど2人で話したのよ」と嬉しそうにいうので「どうでしたか？」と尋ねると「長男の気持ちがわかってよかったわ、でも、嫁がいなかったからできた話だけだね」と笑いながらも穏やかな表情でいう。

【モニタリング】

Aさん自ら環境調整をして居心地のよい場所づくりをおこなっている。家族間でお互いに歩み寄ろうとしてはいるが根本的な関係修復にはまだ時間がかかる様子。デイサービスの運動・口腔機能向上プログラムには積極的に参加され、毎日楽しんでいる。

【アセスメント】

Aさんの第3次アセスメントを実施。3度目

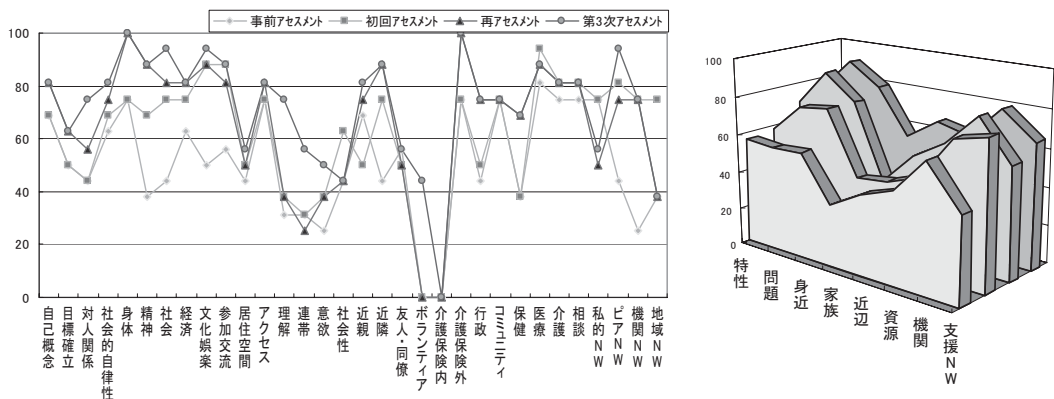


図4 Aさんに対する第3次アセスメント結果と分析

のアセスメントに少し飽きたようで何かと理由をつけては先延ばしにしようとする。生活相談員は、A さんとの対話をふまえ高齢者生活支援ツールで第 3 次アセスメントを実施し分析をおこなった (図 4 参照)。

【アセスメントの分析】

家族・親族との相互理解の溝は簡単にうまるほど浅いものではないが、A さんは長男との話し合いを機に関係修復にとりくもうと努力している。またデイサービスだけでなく自ら知人とのネットワークを構築し、相談相手として上手く活用しながら精神的安定にとりくんでおり、以前にはなかった A さんの自己生活を楽しもうとする姿勢がみられる。デイサービスでは家族との関係修復は長い目でサポートすることにし、A さんが自己生活に生きがいを持ちながら、また病気や介護といった未来に対する不安軽減の一助となるようあらゆる側面から支援していく方向性で今後もかかわりつけていく必要がある。

【考察】

本事例は、A さんの①家族関係による精神的ストレスの緩和、②介護予防、そして、③生きがいある生活という 3 点の生活課題に対し、①「サロン」という新たなデイサービスの機能を増やし、②実践支援ツールによる生活コスモスのビジュアル化から、③多様な支援レポートリーの活用によって A さんと生活相談員との参加と協働により計画的に高齢者ソーシャルワークが展開されている。これにより A さんは、①長男夫婦に歩みようと努力し、また、②他者とのかかわりから自己の存在意義をみだし、③人の役にたつこと、そして、④デイサービス内でおこなわれる介護予防プログラムにとりくむことで毎日を楽しく生きることという、⑤生きがいをもつことができるようになった。

3. 事例 2 独居生活へ移行した B さんへの高齢者ソーシャルワークの展開

【利用者の基本情報】

氏名：B さん 女性 83 歳

性格：おとなしく、対人交流は苦手。

趣味：昔は編みものが好きでよくしていた。

要介護：要支援 1 (平成 18 年 7 月認定)

ADL：全てほぼ自立。たまに排泄の失敗があり汚れた下着を隠す行為がある。家族介護者の負担が徐々に増加している。

家族親戚状況：兄弟 7 人は他界。長男夫婦と同居していたが、長男の死亡をきっかけに嫁は実家へ帰り、平成 18 年 2 月より次男夫婦と同居しはじめる。

住居：次男夫婦の持ち家の一室。

生計：年金と次男夫婦からの援助。

【インテーク・アセスメント】

B さんや家族の住み慣れた街のデイサービスを利用したいとの要望によりケアマネジャーからデイサービスに紹介がある。体験利用の際にケアマネジャーから情報提供をうける。特記には「嫁が話かけても黙って自室に戻ってしまい会話にならない」と書いてある。利用契約後、ケアマネジャーから提供された介護予防サービス支援計画書とインテークでえられた生活情報をもとに、生活相談員は実践支援ツールを使って初回アセスメントを実施し分析した (図 5 参照)。

【アセスメントの分析】

B さんの問題は家族間のコミュニケーション不足や友人・知人といった人間関係の希薄さ、住み慣れない居住地が引き金となっている閉じこもりやそれにともなう支援ネットワーク力の欠如など心理社会的問題が生じている。「生きがい」のない生活になっている。

【プランニング】

B さんに初回アセスメント情報から生活エコシステム状況をみせながら、おもに問題、身辺について詳細に説明する。B さんは「はい、そうですね。ありがとうございます」といっただけでグラフ

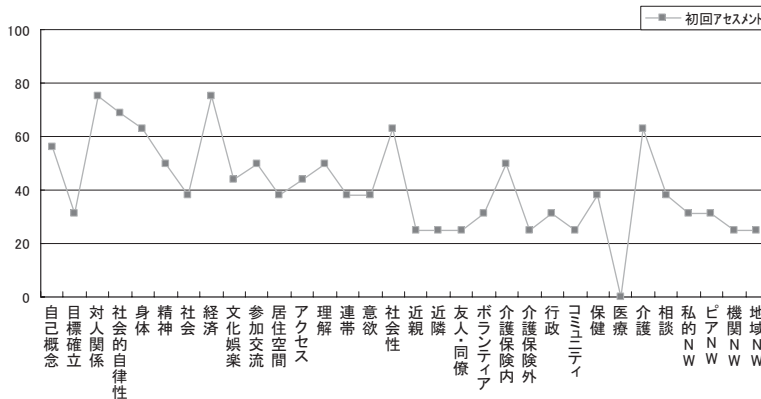


図5 Bさんに対する初回アセスメント結果と分析

表4 Bさんの介護予防通所介護支援計画書の概要

本人家族要望	閉じこもりによる心身機能低下や一人での留守番をさせたくない。 また住み慣れた町のデイサービスを利用したい。
総合的な課題	出かけることがなく社会交流の機会が少ない。
総合援助方針	出かけることが少なく、家に閉じこもりがちであるため、介護予防デイサービスを利用し、人と触れ合うことで心身の活性化が図れるように支援していく。
ニーズ	①閉じこもりをなくし、積極的な社会交流。 ②家族介護者の負担軽減。 ③心身機能低下の防止。
長期目標	①社会への積極的交流による心身機能の活性化。 ②家族介護者の負担、自由の確保。 ③運動機能、口腔機能向上プログラムへの参加による体力の保持。
短期目標	①他の利用者との交流による仲間づくり。 ②介護者の気分転換と休息時間の確保。 ③外出し、筋力低下を防ぐ。
サービス提供内容	健康チェック、口腔機能チェック、社会交流、レクリエーション、食事、送迎の提供。

に対し関心を示さない。介護予防通所介護計画書の作成のため今後の生活に対する希望などを尋ねるも「私はもう歳だから、別段これといって何がしたいとかないですわ」という。結局、希望をいわない B さんにかわって家族の希望をふまえ、週2回の利用計画と支援内容を生活相談員が作成し（表4参照）、Bさんに説明後、同意のサインをもらう。

【インターベンション】

①人数が少なく他の利用者とともに溶け込むも

自主的に活動や会話に参加することはなく、人の話を聞いて笑ったりうなづくだけで、スタッフが声をかけなければ1日話すことなく終わる日もある。

②嫁との関係に関して「私が台所や居間におったら若いもんに悪いでしょう。邪魔だから行きませんの。何か手伝おうとしても嫁さんに『何にもしなくていい』っていわれるし」と Bさんが家族に非常に気を遣っていること、また今の生活で自己役割がないことに不満が

あることなど言葉にする。

- ③家族から週 3 回かつ時間延長を希望され契約の変更をおこなう。B さんも「家に帰ってもすることがないので邪魔じゃなかったら居させてほしい」というので「普段家で何をされているの?」と尋ねると「部屋でテレビをひたすらみているだけ」という。主人を早くになくし長年パートで働いてきたため友人もなく趣味も今では楽しむことがないと語る。
- ④デイサービス会議にて、B さんが身体的に問題なく認知症もごく軽度であることから、安全な「タオルたたみ」の役割を担ってもらってはどうかと提案されたため、B さんに頼むと快く引き受けてくれ、タオルたたみ、スリッパ整理、昼食時の片付けなどが B さんの役割となる。
- ⑤家族から「自分で何でもできるなら一人で住んでみたら?」といわれ、独り暮らしをすることにすると B さんから報告をうける。B さんは「家族に迷惑かけるし一人の方が気が楽やから大丈夫」と語る。生活相談員はケアマネに連絡報告しサービス内容の再調整を依頼する。その後、今まで住んでいた街のアパートへ引越す。

【モニタリング】

以前より人とふれあう機会がふえ、閉じこもりや家族の介護負担も軽減しているが、家族間

の相互理解や自主的な他者とのふれあい、コミュニケーションは進展のない状況である。しかし、デイサービスの生活において目立った認知症の症状はなく、役割以外の仕事も自らみつけては手伝ってくれる。突然の独居生活へも身構えることもなく、まわりの心配をよそに以前と変わらない生活を送っている。

【アセスメント】

ケアマネジャーから独り暮らしの経過をふまえた B さんの介護予防サービス支援計画書の提供をうけ、再アセスメントを実施。ツールを介して話し合いを重ねる。「独り暮らしはどうですか」と尋ねると「嫁さんらに遠慮することがなくなって、重たい気持ちが少し楽になったかんじがする」と実感を述べる。しかし、家族とは相変わらず会話もあまりない様子で「長年一緒に暮らしてなかったのに同居するのは若いものに申し訳ない」という。「なんで『申しわけない』と思うのですか」と尋ねると「というか、私は一人の方が好きな時間に好きなようにできるから・・・要は一人の方が楽なんですわ」と笑いながら話す。生活相談員はケアマネジャーによる評価もふまえ、これまでの B さんの言動およびスタッフからの情報を総合しながら再アセスメントを実施し分析をおこなった(図 6 参照)。

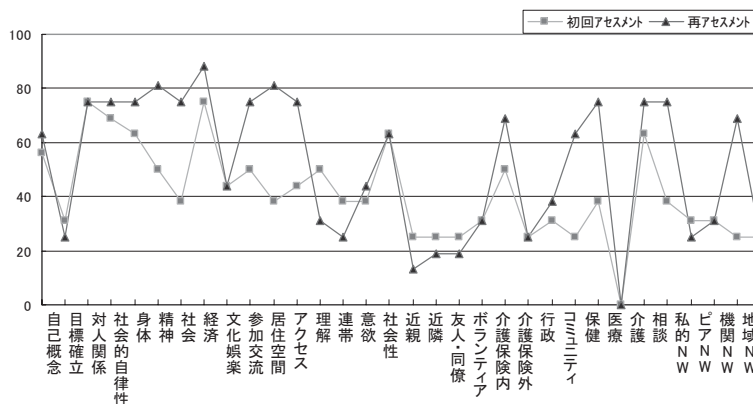


図 6 B さんに対する再アセスメント結果と分析

【アセスメントの分析】

介護予防プログラムや役割遂行は身体・心理・社会的問題の軽減につながっている。また独居生活により家族との関係性に距離ができマイナスに変容がみられたが、本人も実感しているように、居住や家族に対する精神的ストレスが改善されたため身近に大きな改善があった。今後は、独居生活を継続できるよう多機関連携でサポートする必要がある。

【プランニング】

生活相談員が B さんにグラフをもとに生活の変容情報を報告すると「本当だわねえ。今のほうが気持ち的に楽なもの。生活をこうして評価することは大事よね、気持ち次第で生活に対する考え方も変わるし。年老いて忘れることも沢山あるけど、いいことを受け止めておいて楽しく生きないとね、もう 83 のおばあちゃんだしね」と以前はみせなかったグラフへの関心を示しながら自己認識を深めつつ自分の意思を言葉にしていた。そこへ隣にいた A さんから

「B さんも問題が改善されているじゃない！嫁との関係は何もあなただけじゃない、うちもよ？みんな通る道なのよ。ここへきたほうが気分が落ち着くし、いいわよね」といわれ笑って肯いていた。

その後、B さんとともに話し合いを重ね、介護予防通所介護支援計画書の解決すべきニーズや長期・短期目標について決めた（表 5 参照）。前回の短期目標はおおむね達成されていたため、口腔ケアで歯科衛生士に指導をうけた「おしゃべりを積極的にする」ことを目標にしてはどうかと提案すると「話を聴くのは好きだけど・・・まあ、それならできるかもね。なるべく、そうね」と意欲をみせた。そこで、外出は大人数で楽しもうと近所の高齢者にも参加してもらい自然と他者交流が図れるよう配慮した。独り暮らしの維持へは、夕食に簡単な食材で弁当を作り提供するなど、ボランティアとして出来る限りサポートしていくことを伝えると B さん自らも積極的にとりくみたい意気込みを

表 5 変更後の介護予防通所介護支援計画書の概要

本人家族要望	安全な独り暮らし。
総合的な課題	独り暮らしをはじめた。洗濯は嫁が定期的に取りにいき行き、買い物や炊事は自己で行えているが、今後どのようなサポートが必要かは見守りながら検討していく必要あり。
総合援助方針	認知症の症状が軽減しており、9月より独り暮らしをはじめた。引き続き介護予防デイサービスを利用し、人と触れ合うことで心身の活性化が図れるように支援していく。
ニーズ	①閉じこもりをなくし積極的な社会交流。
	②独り暮らしができるよう、身体機能低下の防止。
	③安全で健康に暮らせるよう見守り等の強化による不安軽減。
長期目標	①社会への積極的参加。
	②体力の保持。
	③安全で楽しい独り暮らし生活の維持。
短期目標	①積極的に他者との交流を図る。
	②外出時はなるべく歩き、下肢筋力の低下を防ぐ。
	③健康バランスの良い食事摂取による自己管理。
サービス提供内容	健康チェック、口腔機能チェック、社会交流、レクリエーション、食事、送迎の提供。

注) 斜線部が変更した部分。

みせた。

【インターベンション】

- ①利用者が 5 人以上の時に外出する。B さんはスタッフが手薄であることを察知すると、自ら他の利用者に話しかけ手を引き歩行介助をする。またスタッフの声かけがなくても自然に利用者同士で助け合い、談笑しながらレクリエーションを楽しむ。
- ②自分でできる仕事を見つけては手伝ってくれる。食事の片付けの際には「そのお皿をこっちにちょうだいね。そのお皿はそっちょ」と積極的な言動がみられる。またスタッフや客が来ると大きな声で「いらっしゃい！」と言って出迎えてくれる。
- ③嫁からデイサービスの夕食や安全面への配慮に対し感謝の電話がある。この電話を機に家庭訪問の回数が増え家族とデイサービスとの信頼関係が生まれる。B さんのアセスメント結果を基にデイサービス会議を開き、B さんが独居ではなく家族との同居を前提で、何か家でも役割をもち家族の一員として役割を担いたいという意思が本当はあることを家族に伝え理解してもらうためにはたらきかけていくことが決まる。
- ④寒くなり、寝る前には首にタオルを巻いて寝ること、デイサービスがない日は嫁が電車に乗って魚の煮付けやサラダをもってきてくれることなど話をしてくれる。ときどき、以前

はなかった家族への感謝の気持ちを言葉にする。

- ⑤健康管理について B さんから「デイサービスがない日や嫁がもってこられない日は惣菜やパンを日中買いだめして食べているけど別に何を食べてもいいので平気です」という。
- ⑥いろうで寝たきりのコミュニケーションがとりにくい利用者の所へいき「おばあさん、おはようさん」「今日はどうですか？寒いよ」といって毛布をかけ気遣う姿がみられる。それまで偏見からか声すらかけようとしなかった他の利用者が B さんの姿をみて自然と声をかけるようになり、B さん通所する曜日は和やかな雰囲気になる。

【モニタリング】

積極的にデイサービスの仕事や対話をするようになった。運動・口腔機能の向上プログラムへも自主的にとりくむ姿勢をもち他者への手助けもおこなっている。センターでの生活面は安定し「B ちゃん」と愛称でよばれるなど対人関係は良好。しかし独居生活の安全性やバランスのよい食事管理は本人の意欲とは裏腹にできていない。

【アセスメント】

介護認定再審査で要介護 1 となる。居宅介護支援計画書の提供をうけ、生活相談員とともに半年間の生活について実践支援ツールを介して評価をおこなう。B さんは独り暮らしになって

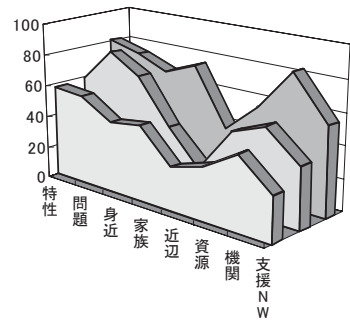
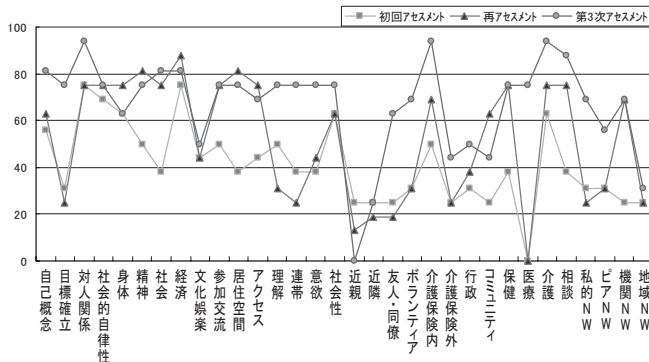


図 7 B さんに対する第 3 次アセスメントの結果と分析

から好きな時間に食事したり寝たりテレビをみたりできるので随分と気が楽になったこと、隣近所に誰が住んでいるか全く分からないから戸締りだけは気をつけていること、嫁が食事をもってきてくれることが嬉しいこと、そしてデイサービスでみんなと話をすることが楽しいことなど話をしてくれる。これらをもとに第3次アセスメントをおこない分析した（図7参照）。

【アセスメントの分析】

自分のペースで他者との交流を図り、笑顔や大きな声が聞こえるようになった。しかしデイサービスのない日は偏った食事をとっており健康面でやや心配が残る。その一方で独居になったことで家族との相互理解が多少すすみ、良好な関係性が構築されつつある。要介護1となったことから新たなサービス内容も視野にいれ、ケアマネジャーと家族と連絡を密にしながら多角的に支援を行う必要がある。

【考察】

本事例は、Bさんの①認知症の進行阻止、②閉じこもり防止、③介護予防、④積極的な他者交流、そして、⑤安全な独居生活という5点の生活課題に対し、①実践支援ツールによる生活コスモスのビジュアル化から、②多様な支援レパートリーをAさんと生活相談員との参加と協働により計画的に活用しながら、③介護予防プログラムを実施し、また、Bさんの独居生活で乱れがちになった食事の管理は、④配食サービスをボランティアで提供するなどの工夫によって高齢者ソーシャルワークが展開されている。これによりBさんは、①認知症の症状が若干軽減され、また、②自ら積極的に他者とのかわりあうようになり、③家族やデイサービスというネットワークをうまく活用しながら、④健康で安全な独居生活をおくることのできるようになった

V 事例の考察

1. 実践支援ツールを活用した科学的支援局面

事例1では、まずインテーク面接における

Aさんと生活相談員との対話のなかで生活コスモス状況の把握が試みられている。この生活コスモス情報から事前アセスメントとして実践支援ツールによる1回目のシミュレーションが生活相談員によっておこなわれ、その後、話し合いをふまえ、初回のアセスメントが実践支援ツールにより実施されている。Aさんは、自己生活が可視化されたことにより、アセスメント結果に興味をわき、プランニングでは、ビジュアル化されたデータをもとに実感をまじえた話し合いが重ねられ、両者の協働による計画書が作成されている。3ヵ月後の再アセスメントでは、Aさんとの話し合いをふまえた情報が実践支援ツールに入力され、提供されたシミュレーションから変容状況や目標達成状況、両者の認識のズレについて話し合いがもたれ協働分析がおこなわれている。これらの分析結果をもとに、再び両者の協働による再プランニング、インターベンション、モニタリング、3回目のアセスメントがおこなわれ、科学的な情報をもとに生活支援過程が展開されている。

事例2では、インテーク面接でのBさんと生活相談員との対話やケアマネジャーからの情報提供から、実践支援ツールによって初回アセスメントが生活相談員によって実施されている。しかしアセスメント分析後、生活相談員はデータを介しながら、Bさんと今後の計画について話し合おうとするが、Bさん自身が初回のアセスメントに関与していなかったため客体となってしまう、受動的な応答になっていることがわかる。独居生活への移行をうけ実施された再アセスメントでは、ツールを介したBさんの参加による再アセスメントが実施されている。そして、実践支援ツールを使った両者の協働による評価により、Bさんの自己生活への関心が高まり、再プランニングでは主体的な参加がみられ、要介護1となった後の一連に支援局面においても意欲的な姿勢でとりくんでいる。結果的に、独居生活を継続して送ることができている。

以上の事例考察から、エコシステム構想による高齢者ソーシャルワークの科学的な支援局面を整理すると、図 8 のような流れが抽出される。まず、インテークでは利用者本人や家族とソーシャルワーカーの対話、ケアマネジャーからの情報提供等をふまえ、ソーシャルワーカーは事前アセスメントとして 1 回目のシミュレーション処理をおこなう。なぜなら、支援計画や支援内容を決定する際の重要な根拠となる初回アセスメント結果がいくらビジュアル化されても、1 本のラインだけで表示された生活エコシステム状況では理解しにくいから、基本となる

データ、つまり比較できる基準値＝ベースラインを事前アセスメントによって表示する必要があるからである。

その後、再度、実践支援ツールによる客観的評価により初回アセスメントを実施し、ビジュアル化された 2 本のラインによるデータをもとに、両者の生活認識へのズレや実感について話し合いながら課題の明確化、生活コスモスへ共有化を図り、利用者の主体性と責任性を尊重した支援計画を作成する。モニタリングによって支援計画の達成状況を確認し、短期、長期目標の達成状況を視野に再アセスメントを実践支援

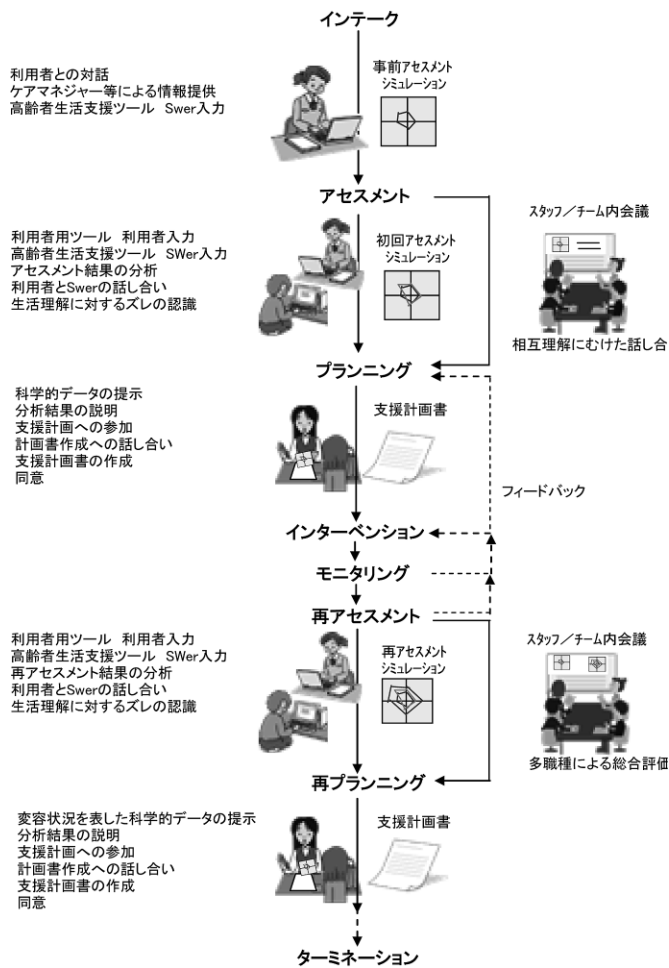


図 8 高齢者ソーシャルワークの科学的支援局面

ツールで実施する。そして、再アセスメントでえた変容状況をあらわしたデータから、再び、利用者とソーシャルワーカーは話し合いをおこない、協働で支援計画を見直し、生活状況に応じた的確な支援計画を作成し実施していくというプロセスをたどる。

2. 実践支援ツールによる科学的情報の意義

高齢者ソーシャルワークの支援局面考察から、高齢者ソーシャルワークの展開における科学的情報をもたらす効果について整理すると、次の5点が抽出される。

- ①ソーシャルワーカーの勘と経験でなく、常に同じ視野（枠組み）で高齢者の生活コスモス情報を分析できる。
- ②高齢者の生活コスモスがビジュアル化されることで多角的、動的に把握でき、共通理解が促進される。
- ③科学的に根拠のある生活課題を具体的に抽出できる。
- ④科学的に根拠のある目標、支援内容が設定できる。
- ⑤科学的根拠にもとづく具体的な支援計画、支援内容によって、高齢者の低迷しがちな士気が高まり、課題解決・自己実現の達成、生きがいがある生活が可能となる。

このように、科学的なエコシステム情報としてシミュレーションされた生活コスモスのデータを介することで、科学的根拠にもとづく支援展開が可能となり、ソーシャルワーカーの勘や経験、場当たりの思いつきのみによる属人的な支援内容、局面展開であった高齢者ソーシャルワークを、高齢者の課題解決・自己実現にむけた社会福祉固有の専門的かつ科学的な生活支援過程として再構築することができると考えられる。

3. 科学的な高齢者ソーシャルワークへのチャレンジ

高齢者ソーシャルワークの科学化にむけ、近

代科学の主要な概念として提示されている論理性、客観性、普遍性の3つの視点からエコシステム構想による高齢者ソーシャルワークについて考察していく。

まず、エコシステム構想における論理性であるが、エコシステム視座からのソーシャルワーク実践理論と循環過程を軸に、コンピュータ科学を活用した実践支援ツールを介することで生活コスモスを具体的に把握する方法論として首尾一貫した主張がおこなわれている。この主張に多義的な曖昧さはなく、実践事例考察の深化からより確信的な理論構築が重ねられつつある。本実証研究においても、それぞれの高齢者の複雑で固有な生活コスモスが実践支援ツールによるビジュアル化によって系統的かつ生態学的に捉えられており、支援活動に役立つ方法となっていることが理解できる。このことから、エコシステム構想の理論と実践の整合性が保たれていると考えられる。

第二の客観性とは、観察結果に観察者の主観が混入することを良しとせず、常に主観と客観、主体と対象、観察者と観察対象とが分離・断絶していることを前提としている。本実証研究では、高齢者に起こるありのままの具体的情報を、第三者の立場であるソーシャルワーカーが高齢者自身やその家族との話し合い、また事実にもとづき収集し、エコシステム情報として実践支援ツールに入力することで生活システムが分析され、客観的事実としてのデータが提示されている。つまり、エコシステム構想は、実践支援ツールを使ったソーシャルワーカーによる客観的事実としての情報入力と構造・機能面からの生活システム分析によるデータ提示からその客観性を重視していると考えられる。

第三に普遍性である。普遍性とは理論の適応範囲が広く、例外なくいつでもどこにでも妥当するということである。高齢者に対するエコシステム構想の展開では、高齢者という固有な対象の生活実体を社会学や老年学における科学的方法から導き出された共通性から生活システム

の枠組みを抽出し、エコシステム情報の構成と内容として構造化している。そして、この枠組みにもとづき開発された実践支援ツールによって、高齢者個々の生活コスモスを理解しようと試みている。もちろん、この枠組みが幅広い年齢層から成る高齢者層全てを網羅するものであるか否かという疑問が今後の実践事例累積による研究の深化に問われる点であることも自覚している。

以上のことから、客観的立場にあるソーシャルワーカーが、高齢者の生活コスモスを固有な共通性にもとづく普遍的基準の枠組みで切り取り、エコシステム視座やソーシャルワークという普遍的な基準としての理論に照合せながら支援局面を展開するというエコシステム構想による高齢者ソーシャルワークは、科学的な高齢者の生活支援方法であると考えられることができる。

VI おわりに

本稿は、高齢者にソーシャルワークの科学化をめざす研究過程において、昨年開発した高齢者用のコンピュータ実践支援ツール「エコスキヤナー」を具備したエコシステム構想による高齢者ソーシャルワークの実証研究を整理し報告したものである。もちろん、デイサービスセンターという限られた現場での事例考察では「普遍性」という科学性の特性に対し限界があることは自覚しているつもりである。

しかしながら、ソーシャルワークを科学化するには、これまでの研究の積み重ねにより考案されたエコシステム構想による高齢者ソーシャルワーク、すなわち「演繹的な方法」による臨床現場での実践活動から、支援プロセスの展開考察を深化させ、科学的な高齢者ソーシャルワークの方法を導き出すといった「帰納的な方法」によって構築するほか方法はないと考える。この発想から、本稿における事例研究を捉えたとき、限られた実践事例のなかでも方法の科学化にむけたエコシステム構想の意義につい

て、ある一定の成果があったのではないかと考える。

今後は、デイサービスセンター以外での高齢者ソーシャルワークの実証研究も累積していく、科学的なソーシャルワークの構築とともにその普及方法を含めた実用化にむけチャレンジしていきたい。

謝辞

本実証研究にあたり、実践事例研究にご理解とご協力を頂いた医療法人の理事長、スタッフ、利用者様をはじめ、ご指導ご鞭撻を賜った諸先生方に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

注

- 1) 太田義弘・中村佐織・石倉宏和他『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング／利用者参加へのコンピュータ支援』中央法規出版 2005年 5頁
- 2) 太田義弘・秋山薊二『ジェネラル・ソーシャルワーク／社会福祉援助技術総論』光生館 1999年 18-19頁において、ソーシャルワーク実践の包括・統合的な動向を意図する用語としてジェネラル・ソーシャルワークという表現を用いると説明している。
- 3) 太田義弘 前掲書 7-8頁
- 4) 竹内愛二『社会福祉の哲学』相川書房 1979年 8-9頁。カントは尊厳という実存主義の中心概念として、人間は自他を尊重「く・・・したいから」(性的に)、あるいはくしなければならぬから」(他律的に)するのではなく、くみずからすすんで～せずにおれないから」(自律的に)なされる行為のみ」人格の尊厳がなりたつと述べた。
- 5) 本論文での支援局面とは、インタークからはじまり、ターミネーションで終わるマクロ、メゾ、ミクロの各レベルにおける一連の支援プロセスの意味。
- 6) 本論文での支援過程とは、マクロ・レベルからミクロ・レベルをフィードバック、フィードフォワードを通じて循環する支援プロセスの意味。ジェネラル・ソーシャルワークの支援過程そのものを指す。

- 7) 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房 1995年 79頁
- 8) 太田義弘 前掲書 97頁
- 9) Mark A. Mattaini, Christine T. Lowery, Carol H Meyer, *Foundations of Social Work Practice : A Graduate Text*, NASW PRESS, 2002, p. 4.
- 10) 中村佐織『ソーシャルワーク・アセスメント／コンピュータ教育支援ツール研究』相川書房 2002年 33-35頁
- 11) 木原活信「ソーシャルワークの理論とスキル」岡本民夫・平塚良子編著『ソーシャルワークの技能／その概念と実践』ミネルヴァ書房 2004年 70-71頁
- 12) 太田義弘・中村佐織・石倉宏和他 前掲書 26-27頁によると、社会学で用いられてきた理論と実証を統合させていくための概念「中範囲理論」という発想から示唆をえて、ソーシャルワークにおける理論と実践の乖離を克服する概念を「中範囲概念」とした。
- 13) 太田義弘 前掲書 33-36頁によると、ソーシャルワークの構成要素である価値・知識・方法（介入）の知識を、わが国の社会福祉の実情にあわせ、生活理解のための知識〈知識〉と制度・政策のための知識〈方策〉に二分し、わが国のソーシャルワークの構成要素として価値・知識・方策・方法の4構成要素を提案している。
- 14) エコシステム構想におけるエコシステム情報の因子は、内容構成子を成り立たせる要素の意味であり、因子分析の因子とは一線を画した意味をもつ。
- 15) 太田義弘「ソーシャルワーク実践研究とエコシステム構想の課題」『龍谷大学社会学部紀要』第20号 龍谷大学社会学部学会 2002年 1-16頁参照。現在採用されている因子ポイント計算法は、質問項目に対する回答枠を「(関心)がある」から「事例に情報がない」までの5つにし、それを100ポイントで分割し、上から40、30、20、10、0ポイントと位置づけ、最高値の40ポイントにあたる回答枠が理想的な生活状況となるよう回答内容を考案している。計算により提示されるポイントの意味は、その利用者のおかれている状況の位置を示すものであり、今いる位置からの変容状況に意味づけをおこなうための基準である。
- 16) 小榮住まゆ子「支援ツール〈エコスキナー〉を活用したソーシャルワークの意義／エコマップとの比較考察を通じて」『日本看護福祉学会誌』(第12号2) 2007年 43-54頁
- 17) 中村佐織 前掲書 9-10頁